

6) 「信仰への奉仕」は？

キリストのまことのいのちに生かされたキリスト信者は、すべての人が、同いいのちによってより豊かに生かされることを願っています。人間が生きていくには、物質的、社会的なさまざまな必要が満たされなければなりません。より根本的には、喜びの内に生きていくこととする深い希望や動機が必要です。「信仰への奉仕」は、この喜びのもとにある信仰そのものを人びととともに分かち合おうとするもので、キリストのメッセージを言葉や生き方で伝えたい、祈りを整えたい、祈りを通して、人びとに真に生きる力と希望を与えるという働きです。司祭に限らず、信徒もそのような必要のために働くよう招かれています。

具体的な「信仰への奉仕」のカタチとしては、典礼や祈りにおける奉仕、信仰教育や信仰養成の担当、信仰講座などの宣教活動へのかわり、さらには、そのような活動を支える教会の司牧や運営のために必要なさまざまな役割の担当などが考えられます。

このような奉仕は、特に司祭やメンバーの働きとかわる部分が多くなり、互いの役割について十分な理解や協力関係が必要です。そこに、信徒のほうからより適切な奉仕ができるものもあれば、司祭にしかできない部分も含まれるからです。



7) 「存在としての奉仕」は？

「存在としての奉仕」は、日常生活全体を含む、その人の生き方として示されるものです。このような奉仕は、高齢者や障害者、あるいは病者において示されることの方がより多くなります。このような人々と関わる

人びとは、その人たちの普段の生活の中で表される何気ない態度や表情、あるいはその人の置かれている立場から気付いたこととして語られる言葉などによって、人間が生きていく喜び、生きていく上で本当に大切にすべき事柄など、真に福音的な生き方について深く気付かされるのです。奉仕とは、目的を持って意図的に行われる活動、というように理解されがちですが、より根本的には、その人の存在が喜びや希望に満ちたものであるという、あり方そのものが大切なのです。

このような奉仕のあり方は、意図的に行われる活動ではありませんし、特定の役割を果たすという狭い意味での奉仕職にはあたりませんが、すべての人に開かれています。信仰のあるなしにかかわらず、行われるものでもありません。ただ、すべてのキリスト者は、それぞれが属する家庭、職場、地域社会などで、個々の行動を超え、その存在全体を通してキリストをあかしする存在となるよう招かれています。あかしのある方は、その人の固有の賜物に応じてさまざまですが、「存在としての奉仕」を意識して生活することは、なにも増して大切な奉仕といえるでしょう。